

「第2回語り場」概要報告

2021年6月26日(土)14:00~16:10に開催した「第2回語り場」の報告です。

まず仁徳地域商会が行っている「語り場」とは、どのような場だと考えているのかについて説明します。

各人の夢が実現できるよう、参加者の持っている経験やネットワークを駆使して、“おせっかい”し合う場なのです。同時に、地域で頑張っている人たちの活動を知る場でもあるのです。

なお仁徳地域商会は、仁徳地域（仁保地域・徳地地域）を中心に活動する任意団体です。

さて当日の報告です。初めての参加者もいらっしゃいましたので、今回も仁徳地域商会の設立経緯の説明と出席者の自己紹介を行いました。参加者は、会場が全員で19名、Zoomによる参加が3名でした。

まず初めに、会員の竹本実さんが「一步前へ」と題して、所有の山をはじめ周辺の山も含めて整備されている様子を熱く語られました。定年後実家傍に建てられたお住まいと兵庫県宝塚市の自宅とを、毎月車で400キロを夫婦で往復の生活を10年余も続けられているのだそうです。

山の整備は、親御さんが健康に過ごせたらということで、ご一緒に取り組みましたそうです。当初は放置されていた山の開墾程度でしたが、現在では山内の樹木の伐採等整備を完了し、道路や小屋・展望台の設置と地域内にある滝を中心にモミジ70本の植付・椎茸の栽培さらには約30種の果樹の植え付けを実施され、最近では自然の中で鳥の声を聴き、イノシシやガラスと知恵比べしながらの生活を送っておられるとのことでした。なお宝塚での旅行・美術館・コンサート・神社仏閣等の文化に触れる生活も楽しんでおられるようです。

徳地でのこのような取組の中で、楽しみ喜びと共に農林業が如何に大変であるかを実感されるものの、行動なしにこの体験はできないと考えておられるそうです。自然の中での生活は最高で、今後も健康に留意して継続的に改善取組を実施したいとおっしゃいました。

お話の中で、山に親しみを持ってもらう取組として、親子によるモミジの苗の植付体験を考えたいとおっしゃったことに大きな可能性を感じることができました。安全性に配慮する必要がありますが、山の中で楽しい体験ができれば、モミジの成長を見守ることだけでなく、もっと山に親しみを持ってもらうことができるのではと思いました。

次いで会員の阿部果奈子さんが「自然循環型農業を目指して」と題して、平成30年(2018年)から始められた水稻栽培について話してくださいました。阿部さんが農業に取り組まれるようになった理由は、18時間にも及ぶこともある障害者施設での仕事では、お子さんたちとの大切な時間が持てないからだそうです。そのため家族全員で徳地八坂に移住してこられたのだそうです。

2坪の農地での子どもたちとの楽しい農作業から、農業に取り組んでみようと思われたそうです。当然のことながら慣行農法による稲作を、まず学ばれたそうです。過重な労働にならないようにする、労働に見合う収穫を得るためには、慣行農法もやむを得ないと理解しつつも、農薬づけの現状に疑問を持たれたことから、自然循環型農業を目指すようになったのです。子どもたちの未来のために、SDGsに基づく持続可能な農業を追求しておられます。その一環として、少し経費はかかりますが、J-クレジット制度に基づくカーボン・オフセット有機米の販売に取り組んでおられます。なお真砂土に自家製のもみ殻燻炭を混ぜた苗床に手蒔きによる種まきをされているためか、苗の成長が悪く、機械による田植えに苦労されているそうです。窒素分が不足しているのだそうですが、苗床に天然由来の窒素分を加える方法をご存知な方はいらっしゃいませんか。また、障害者施設に勤務された経験があることから、将来的には障害者の雇用の場の確保にも取り組みたいとおっしゃっていました。新たな夢が広がっていきます。

最後は役員でもある市原さんです。「まつたけ再生事業プロジェクト」と題して、現在の取組状況なども含めてお話くださいました。荒れ果てた里山の現状に警鐘を鳴らされ、少しでも良くして次の世代に渡していくことが、今の高齢者の責務ではないかと主張されました。

さて、なぜまつたけかですが、かつてはこの地は「まつたけの宝庫」であったことから、まつたけに対する想い入れを持つ高齢者まだ多いからだそうです。また一般的にもまつたけに対する関心が高く、里山を再生するきっかけづくりの象徴とするのは適切ではないかとのことでした。

活動拠点や市への助成事業への取組についてのお話もありました。まだ公表できる段階ではないが、目星をつけた空き家が2,3あり先方と交渉していると、市原さんと一緒に活動しておられる松田さんからありました。さらにゲストハウスの可能性についても検討しているといったことまで飛び出してきました。また徳地地域は菌類が豊富であり、これを使った展開も考えられる、さらに学者だけでなく一般の人(子供を含む)の中にも、動植物の生態に詳しい人がおり、動植物生態調査観察事業といったものも里山の再生にとって必要な事業ではないかといった話がありました。とにかく楽しい体験をしていただくよう工夫することが大切だといった指摘もありました。

さらにこのプロジェクトを進めるに当たっては、出資・意見反映・労働が一体となった組織で、地域に貢献し地域課題を解決するための非営利の法人の設立を考えている。その法人として、2020年12月に公布されたばかりの「労働者協同組合」を考えていると表明されました。ただ施行は公布後2年以内となっているので、当面は任意団体として出発することになるとの言及もありました。また市の助成事業「元気生活圏元気創出応援事業」についても、限度額25万円ではあるが100%補助であり、申請に向けて準備しているとの報告もありました。

以上です。本日の3つの発表はいずれも繋がりがあり、「地域資源再生開発研究所構想」として、関心を寄せる人たちが協働して進めると、具体的な成果が生まれてくるのでは感じました。私も個人的に関わっていきたいと思っています。発表された皆さん、大変お疲れ様でした。

【事後談】

まつたけ再生事業プロジェクトの推進母体となる地域資源再生開発研究所を、2021年7月28日に8人の参加で任意団体として発足されたそうです。また市の助成事業「元気生活圏元気創出応援事業」にも採択され、今後の展開が期待されます。

【文責：東孝次】

